3．計画目標（上位計画、要望）

3.1. 事業目標

東京大学の附属学校として、東京大学が取り組む大きな新方針に即した学校とする。

□　学びそのものの革新によりＧＩＧＡスクール構想を先導する。

CASEER

□　学校の文化・芸術創造拠点化により共生社会・地域を創造する。

ACUT
ART CENTER
THE UNIVERSITY OF TOKYO

□　上記を含め、東京大学の施設に求められる基礎的な安全環境・情報環境などを備えた校舎とする。

・空間UI（ユーザーインターフェイス）を備えたＤｅＡＬ教室の拡充・発展
　　（ＤｅＡＬ：ディープ・アクティブ・ラーニング）
・情報ネットワーク環境の整備
・芸術の制作・展示/ワークショップ/上演スペースの充実
・校舎・校地の完全バリアフリー化（エレベータの設置他）
・自学自習に適したフリースペースの展開と活用
・管理機能の再配置

3.2. 施設の改修目標

事業目標に沿いつつ、附属のカリキュラムにふさわしい次世代の学びの空間を創出するため、改修計画の方針を定める。

3.2.1. あるべき施設イメージ

1．学びを深められる学校施設
2．「一斉に教える授業」以上の「自発的な学び」が展開できる学校施設
3．深めた学びを掛け合わせることができる学校施設

3.2.2. 施設コンセプト

A　学びを深める　～　「教科学習は文化との出会い」

① 高機能の普通教室
② 多教科の特別教室
③ 興味喚起のできるラボ・回廊
④ 「一斉に教える授業」以上の授業展開ができる施設
（DEAL、プレゼンホール、ラーニングコモンズ）

B　深めた学びを掛け合わせる　～　「学びの空間が、学校を変える」

① 生徒×生徒　：　教室・様々なコモンズ・クリエイトラウンジ・探求パティオ
② 生徒×先生　：　ラボ・ラーニングコモンズ・教職員コモンズ
・クリエイトラウンジ
③ 先生×先生　：　教職員コモンズ・クリエイトラウンジ
④ 学校×地域　：　モノづくりコモンズ・プレゼンコモンズ・連携パティオ
⑤ 探究×協働　：　探究パティオ、協働パティオ、クリエイトラウンジ

3.3. 施設改修に向けての重点ポイント

①.「探究・協働」の活動をふんだんに取り入れる普通教室の整備

本校では 2005 年度より「全ての教科の全ての時間に、探究活動・協働の活動を組み入れる」授業つくりを行ってきた。黒板に向けて開いたコの字型の机配置を基本として、学級の生徒同士が常に顔の見える関係で学習を進めるとともに、4 人組で机を合わせた小集団活動も頻繁に取り入れている。

他方、教室の造り自体は 40 年前のスタンダードのままなのでそうした活動に対して極めて狭隘であり、ロッカースペースを廊下におくなどで何とか対応しているものの、プロジェクターを利用したり情報端末を活用したりする場面では支障を来している。

普通教室の空間を拡げ、3 面ホワイトボードの設置やＩＣＴ対応など、今後の発展可能性を持った教室として設計する。

②. 図書館を核にしたラーニングコモンズを校舎の中核に据えた探究空間に

現在でも本校図書館は豊富な蔵書数とオンデマンドの適切な配架を誇る探究学習の空間として活かされている。生徒個々が司書の支援を受けて探究活動に利用するだけでなく、教科の学習・総合的学習ともに授業全体での活用がすすみ、6 校時全部が埋まっている日も珍しくないほどである。

この空間を大きく拡張し複数の授業利用を可能とするとともに、これまではインプット中心であったものを、協働でのまとめ作業や、最終プレゼンテーションといったアウトプットまで行える「ラーニングコモンズ」として整備する。

この「学びのアウトプット」は探究的な学習を考えるうえで大きな点であり、後に述べるビジュアルアーツエリア・パフォーミングアーツエリアの充実にも関わるものである。

③.「からだまるごと」で他者・世界とつながる空間 UI（ユーザインターフェイス）の導入

学習の個別最適化の手段として、今後も大いに発展が期待きれている ICT であるが、モニターの向こうには古今東西の世界が開けているとは言え、作業としては非常に狭い範囲の閉じた空間でキーボードとモニターに張り付いての学習となりがちである。デジタルネイティブ世代ではプライベートな時間もスマホやタブレットにかじりついている生徒が多く、そうした中で育まれる身体性に危惧を表明する教育関係者も多い。

そこで本校では数年前から東京大学教育学部と企業との共同で空間 UI 技術の研究を行っている。これは PC 制御されたプロジェクターを使い、あたかも机上が大きなタブレットになったかのような機能を持ち、顔を寄せ合う・指さす・のぞき込む・ペンでき込むといった、からだまるごとの働きを生徒同士が共有しながら学習を進めるものである。

2021 年度よりこれを 2 カ所に増設したが、これをラーニングコモンズや特別教室に効果的に配置し、より多くの生徒がこの恩恵を受けられるよう発展させる。

④. 特別教室の可塑的で効果的な再配置

現在本校の理科室は「物理・化学・生物・地学」それぞれに展開できているが、互いの距離が遠く「理科」全体での活用を困難にしている。また「被服室・調理室」「製図室・金工室・木工室・OA 室」「美術室・工芸室・音楽室」などが校内各所に点在しており、教科を超えて融通し合いながら運用している。

これらを今後 40 年間の変化発展に耐えうるフレキシブルな構造に集約し、自然科学エリア・生活科学エリア・情報技術エリア・ビジュアルアーツエリア・パフォーミングアーツエリアなどとして再編する。

⑤. 広く市民に開かれたイノベーティブコモンズとして

これまでの学校建築は生徒の管理と安全を第一に、囲い込むような鎖的な空間となりがちであった。しかしながら Society5.0 の生涯学習社会を展望したとき、地域の文化の城として開かれた空間として整備していくことが求められている。

本校では 2019 年度に発足した東京大学芸術創造連携研究機構（ACUT）の一翼として、これまで生徒・保護者とアーティストをつなぐワークショップ・講演会を十数度にわたり展開してきており、その一部は他校の生徒にも開放され成果を共有してきた。

2021 年度には文化庁の後援も受け、これを市民に向けて開かれたものとして発展させ、「芸術祭」というかたちで実現した。ラーニングコモンズ・ビジュアルアーツエリア・パフォーミングアーツエリアを市民にとってアクセスしやすいものとしてデザインしていく。

⑥. 学校空間の完全バリアフリー化

現在本校には昇降口にスロープが設置されているほかは、総合教育棟にエレベーターが 1 基あるのみで、ケガによって松葉杖の生徒が出るとたちまち難儀を強いられる状態である。まして車椅子をはじめ、様々な事情で階段の利用ができない生徒には全く対応できておらず、公開行事においても高齢者や障がいを抱えた方が参加する場合の障壁となっている。

これを本校舎へのエレベーター2 基増設によって改善を行う。

3.4. リノベーション協議会でのキーワード

リノベーション協議会では、毎回活発で深い含蓄のある意見をいただくことができた。これをキーワードとして抽出・整理し、リノベーション検討の骨格とすると同時に、最終的な充足率を検証し、計画の充実度の検証にも役立てていく。

学びの枠組み

コモンズ

・「コモンズ」～これからの学校をイメージさせる言葉
・学年コモンズ、教室コモンズ、２５人等のファミリーが集散できるサブフレーム⇔大広間

ミックス

・時間、ゾーニングでの切り替え ＋ デジタルの力でモードチェンジ
・今後の地域と学校の関係性を考える新しいセキュリティのあり方
・市民との協働へ。テクノロジーを活かす。

カリキュラム・クラスの単位

・生徒側の組織 ～ クラスの概念、カリキュラムとの連動、教科教室型などへの視座
・普通教室は結構空いている印象

附属＋地域

・附属学校において、地域と協働というコンセプトはチャレンジングで意識が高い

運営・生活

セキュリティ

・2 階フロアに集約したラーニングコモンズの可能性。セキュリティ設定。
・学環コモンズでのトラブル経験。以降カードキーなどで安全性を確保して運営。
・今後の地域と学校の関係性を考える新しいセキュリティのあり方→市民との協働へ
・セキュリティ。安心して学べる環境

上下足

・履き替えは多様な解がありうる。
エントランスで拭う～ロッカーで履替え。
・１足性、２足性　→　1.5 足性

ニューノーマル

・広い空間による換気計画
・カーボンニュートラル、ゼロカーボンキャンパス、産学連携

テクノロジー

・テクノロジーを活かし、今後の地域と学校の関係性を考える新しいセキュリティのあり方・時間、ゾーニングでの切り替え　＋　デジタルの力でモードチェンジ

空間・スペース

回遊性

・「回遊性」などの空間の特徴と「附属での学び」との関連付けは？
・街並み、商店街のような校内空間
・技術室廻りのは道具が多く、回遊性のルート上にあると危ない可能性がある。

フレキシビリティ

・限られた床面積内でのフレキシビリティ
・日中の教室をフレキシブルに使うこと
・通路⇔教室という区分がはっきりしすぎている　→　縦２本の廊下やいろいろな場所を、別用途にも拡張

新たな興味喚起

・準備室は貴重なラボ空間。
・ガラス張りの空間で興味喚起
・街並み、商店街のような校内空間での発見や刺激

中高の空間・大学の空間

・大学的な空間を目指すのか
・一足制における大学の校舎と中高の校舎の違い

附属校の総合学習の課題

協働作業スペースの不足
プレゼンスペースの不足
テーマ選びの段階での支援
図書館は大賑わい

コモンズの多様性

コモンズとは「占有されていないこと」（空間のオープン性ではなく）
心理と空間を関連づけた居場所の形成。
「集中と自由」「協働と個別」の２軸、「ほっこりとみっちり」などのオノマトペ等
アートやパフォーミングにおけるコモンズとは？

ラーニングコモンズの成立

【原則１】居場所であること
【原則２】話してよい空間
【原則３】体系的支援
兼用について原則と展開

普通教室の進化

普通教室の質の確保の重要性。　特別教室の充実に対し、建設当初からの懸案であり解消すべき
普通教室の板書面の不足
教室とプレゼンスペースは類似機能。普通教室に装備すべき機能の検討

教科学習は文化との出会い

総合学習⇔教科学習　両方が大事
ラーニングコモンズは総合学習だけでなく教科学習でも使う
ひとりになれること。それが保証できる空間

運営とのマッチング

空き教室の活用：授業時間割などとセットで検討。可変型空間などの検討
プレゼン空間の規模と数：120 人規模のスペースが、最低２か所、理想は３か所必要と感じる
音の問題：音の出る特別教室の配置への配慮

■長澤先生資料　「アクティブラーニング、探究学習のための空間とは」

「多様な学習形態が時間とともに変化することに対し、必要な場を連続的、一体的に用意する」
「学校施設全体を学びの空間として創造する」

■複数の委員の先生方からの指摘

① 占有されない場を作ること
ex・コモンズによる学びの空間
・普通教室と個人ロッカー
・ラーニングコモンズの空間と授業の空間はモードが違う

② 利用する場のタイプ（性質）を選べること
ex・多様な場が用意され、その時の自分にフィットする場を選べる。
（わいわい、じっくり、いきいき、ほっこり、・・・）
・一人になれる場も重要
・画一的な空間ではなく、個性的で興味喚起のできる空間を

③ 教職員集団の新たなありかたをつくること
ex・教職員コモンズでの先生同士のコミュニティ形成（授業・生活指導・部活動）
・教材の共有による意識の共有と省スペース
・附属としてのまとまりをもった授業のありかたへ
・教科×教科で新たなカリキュラムを育む力へ

④ 可変空間は使われにくいこと
ex・放課後コモンズのあり方　「最低限コモンズとして整備し、そこで授業を」
・可動として作っても固定的になってしまう例も多い

■講演会『新しい時代の創造的な学習空間作り（国立教育政策研究所）』

今の学校は、それが生まれた当時とは社会環境が大きく変わっていること。
校舎なども変わっていくべきであること。

3.5. 三者協議会でのキーワード

項目	意見
全般・動線	・一足制　・3 階をつなげたい　・エレベーターを本校舎と体育館に ・わかりやすい教室の配置　・行きたい場所と階段がわかりづらい ・集中した教室配置（横に一列とか）
普通教室 黒板 ロッカー	・教室を広く　・3、4 年を同じ廊下に並べる　・黒板が小さい ・黒板が広いと書くスペースが広い　・スライド式黒板　・黒板を 3 面 ・黒板をホワイトボードへ　・電子黒板 ・教室内にロッカー　・ロッカーが小さい　・一番下のロッカー使いづらい
図書館 自習室 学習スペース	・図書室が狭いくつろげる場所　・図書室のイスを増やしてほしい ・明るい図書館・図書室の自習室を広げて、ラウンジをきれいにし、人が読みたがるような本を置く ・自習室と図書室を分離　・放課後自習スペース　・グループワークができる場所　・グループワークスペースと図書館を薄い壁で仕切る ・立ち学習可のデスク（木ではなくて軽い素材） ・図書館だと自習の生徒と授業を別々に　・学習スペース職員室の近くに
特別教室	・物理室や生物室など場所がバラバラで迷う ・音楽室広さ　・音楽室を防音に　・休み時間でも気軽にピアノが弾きたい ・広い木工室機械もたくさん　・時間制限ないパソコン室 ・DeAL 教室のような ITC の親和性をもっと高くした教室に　電子黒板
学習スペース	・学習スペース職員室の近くに ・立ち学習可のデスク（木ではなくて軽い素材）　・自習スペース ・放課後自習スペース　・グループワークができる場所
卒業研究	・発表準備を放課後にする場所がない ・気軽にプレゼンの練習をする場所が欲しい
職員室 保健室 面談室	・先生と生徒が集まれる、楽しく会話できる場所　←生徒と先生が気軽に話せる職員室　・教官室を一か所にまとめる　・保健室を憩いの場に ・面談室の設置　・面談ができるスペース
ラウンジ 談話	・学生ラウンジの整備　・ラウンジを真ん中へ　・ラウンジ使いやすく ・談話スペース　・休み時間にさわげるスペース　・リラックススペース ・他校：学年のフロアにたまるスペース
食堂・生徒会室・ ホール・更衣室	・みんながおしゃべりできる食堂　・昼食をどこでも食べられるように ・明るい食堂　・生徒会室を広く　・大教室を小ホールに　・更衣室返して
中庭・屋上	・中庭に池とかベンチお話している　・中庭をきれいに活用する ・ディスカッションできるきれいな屋上　・屋上の有効活用 ・半屋外スペースほしい　・もっと緑が欲しい

3.6. 改修の方向性の設定

改修計画の主要な点の方向性について、具体的な平面案の検討に先立ち、協議会を通して下記のように合意を図った。これにより計画の流動変数を絞り、計画のバリエーションを絞ることで、重要な点についての議論の密度を高めることができた。

上　下　足	一体的活用のできる上下足のあり方を整理
階　構　成	地域との連携機能を積極的に１階に
回　遊　性	単なる周回廊下ではない、豊かな回遊性を形成
普 通 教 室	機能や広さを拡張方向で
特 別 教 室	文科省に提示の各室を確保
準　備　室	興味喚起、専門深掘り、のできるラボに
ラーニングコモンズ	積極的な導入 ＋ 附属の教育とのマッチングの構築
教員コモンズ	校舎棟にも設定し、ミックス・共用の効果の創出
中　　庭	上下足のあり方とも関連付けて、積極的活用
３階での回遊	ＡＢ棟３階を行き来できる屋上通路を計画
渡り廊下増設	将来構想として扱う（総合棟⇔体育館、クラブデッキ⇔本校舎）
ローリング計画	今ある場所と違う場所に移動することを前提